学園だより
名古屋電気学園
愛知工業大学
愛知工業大学情報電子専門学校
愛知工業大学名電高校
愛知工業大学附属中学校

目次：

辞令交付式	2
年度始め式	3
設置校入学式	4
中高そろってV	5
選抜大会で優勝	7
2氏に理事長賞	7
全日本2度目V	8
愛名会総会	8

発行所
名古屋電気学園
〒470-0392
豊田市八草町八千草1247
TEL (0565)48-8177

学園の二十九年度新体制がスタート

大学副学長に曽我部教授

新しい体制で行われた年度始め式

名古屋電気学園は四月一日、組織変更と人事異動を行い、平成二十九年度の新体制がスタートしました。

主な人事では、大学副学長に曽我部博之教授、工学部長に杉野丞教授、経営学部長に石井成美教授、情報科学部長に伊藤雅教授、基礎教育センター長に磯部哲也教授、工学研究科長に櫛田玄一郎教授がそれぞれ就くほか、研究支援本部長・総合技術研究所長に鈴置保雄教授が就任します。

主な組織変更としては、学園事務局の総務部・財務部・管理部と秘書室の三部一室を総務部・財務部の二部に統合し、管理部の管財課を財務部に、調達課と警備課、および秘書室を総務部に置きます。

辞令交付式／年度始め式

辞令交付される曽我部博之副学長

学園の辞令交付式は八草キャンパス本部棟で、新規採用者、任命・昇格者の順に行われました。新規採用者は大学教員十人、高校教員三人、中学教員一人の合わせて十四人です。任命は大学教員十二人、昇格は大学教員七人、事務職員（管理職）二人です。

学園理事らが立ち会い、一人ひとりに後藤泰之理事長から辞令が交付されました。後藤理事長は、新規採用者への挨拶で「学園の教育のモットー『創造と人間性』のもと、優秀な人材を育てる使命があります。大いにご自分の力を発揮して頑張っていただきたい」と激励しました。また任命・昇格者に対する挨拶で「着実にまじめに取り組む学園の姿勢が社会で評価され、信頼を得ています。その姿勢を崩さず、皆さんの力を合わせてますますの発展に寄与していただければ」と述べました。

吉村真晴・石川佳純選手が金メダル獲得！

五月二十九日～六月五日に開催された世界卓球選手権ドイツ大会個人戦で、混合ダブルスの吉村真晴選手（本学出身、名古屋ダイハツ）と石川佳純選手（全農）のペアが優勝を果たしました。この種目での日本勢の優勝は、ともに本学出身の長谷川信彦選手・今野安子選手のペアが優勝した一九六九年ミュンヘン大会以来、四十八年ぶりです。

吉村選手は経営学科四年生だった二〇一五年の世界卓球で石川選手とペアを組み、混合ダブルスで惜しくも銀メダル。その〝リベンジ〟を誓って今大会に臨みました。準決勝、決勝ともに、1―3から3ゲームを連取しての逆転勝利を成し遂げ「応援していただいた皆さんに恩返しができました」と喜びを爆発させました。コーチとして参加し、ペアと共に前回の雪辱を期した本学男子卓球部の鬼頭明監督は「苦しい場面でもミスを恐れず、最後まで果敢に攻めた。前回の敗戦経験が生きたと思う。勝因はずばり、メンタルの強さ」と語っています。

48年ぶりの金メダルに輝いた吉村真晴・石川佳純選手
（写真提供：ニッタクニュース）

辞令交付式

任命

任命の大学教員の皆さん

【大学教員】曽我部博之副学長（建築学科教授）、杉野丞工学部長（建築学科教授）、石井成美経営学部長（経営学科教授）、伊藤雅情報科学部長（情報科学科教授）、磯部哲也基礎教育センター長（基礎教育センター教授）、櫛田玄一郎工学研究科長（機械学科教授）、鈴置保雄研究支援本部長・総合技術研究所長（電気学科教授）、鳥井昭宏教学センター長（電気学科教授）、津田紀生キャリアセンター長＝再任（電気学科教授）、鈴木晋計算センター長（情報科学科教授）、古橋秀夫ロボットミュージアム館長（電気学科教授）、内田敬久教学センター副センター長（機械学科准教授）

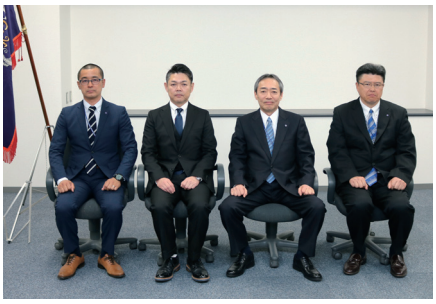
新規採用

後藤理事長らを囲んで、新規採用の皆さん

【大学教員】星野博之教授（電気学科）、松村年郎教授（電気学科）、田中浩教授（機械学科）、塚田敏彦教授（情報科学科）、岩野佳英子教授（基礎教育センター）、香川高弘准教授（機械学科）、羽田裕准教授（経営学科）、小出禎子准教授（基礎教育センター）、細淵勇人講師（建築学科）、宮本寛子助教（応用化学科）【高校教員】若松文彦教諭、石川裕斗教諭、川島徳巳教諭【中学教員】加藤千晴教諭

昇格

昇格の大学教員の皆さん


昇格の事務職員の皆さん

【大学教員】奥川雅之教授（機械学科）、吉成亮教授（経営学科）、小林富雄教授（経営学科）、水野勝教授（情報科学科）、元谷卓准教授（電気学科）、一刀祐一准教授（基礎教育センター）、東平彩亜准教授（基礎教育センター）【事務職員】西裕之課長（管財課）、奥田好弘課長（キャリアセンター）

定年退職式18人ねぎらう

学園の平成二十八年度定年退職者辞令交付式が三月二十八日、八草キャンパス本部棟会議室で開かれ、大学教員八人、高校教員二人、専門学校教員二人、事務職員六人の合わせて十八人が三月三十一日付で定年退職しました。退職者一人ひとりに、後藤泰之理事長から辞令と、後藤尚之事務局長から記念品が、それぞれ手渡されました。

後藤理事長は、挨拶で「私学を取り巻く状況が厳しい中、各設置校の新入生は順調に集まっています。みなさま方のご尽力の積み重ねが今日の学園につながっています。今後もそれぞれのお立場から、ぜひともよきアドバイスをいただければ」と語りかけました。

これに応え、退職者を代表して大学経営学科の石垣尚男教授が「愛工大には研究の自由があり、研究室は二十四時間・三百六十五日、いつでも使うことができました。自由に研究できた素晴らしい環境に感謝しています。退職者一同、学園の発展を心から祈念しています」と謝辞を述べました。

後藤理事長らと記念撮影する定年退職者の皆さん

定年退職者は次の皆さん。

【大学】江口一彦、谷本隆一、石垣尚男、鬼頭繁治、岸政七、戸伏壽昭、松本伊瑳子、古市裕司

【高校】久保芳孝、渡邉績

【専門学校】山内康義、村瀬正敬

【事務職員】川出善晴、粟津敬雄、相原隆、立枕孝之、柏本純、竹松宏

「日々努力の積み重ねが信頼に」

年度始めの挨拶をする後藤泰之学長

大学の平成二十九年の年度始め式は四月一日、八草キャンパス10号館大講義室で学園・大学の教職員が出席して行われ、後藤泰之学長が挨拶しました。

副学長・学部長・基礎教育センター長の紹介、新規採用・任命・昇格者の紹介や、学長賞の表彰がありました。後藤理事長・学長の挨拶要旨を紹介します。

年度始め式・後藤泰之学長の挨拶要旨

明日の大学入学式で、新たに千五百三十四人の学生を迎えます。定員超過率の問題があり、他大学と同様、かなり絞ったつもりでしたが、予想以上に多くの入学者を迎えることになり、いよいよ二十九年度がスタートします。少子化に伴う二〇一八年問題が来年に迫る中で、志願者の数だけでなく入学の手続きも非常に順調でした。やはり社会に信頼される大学としての、これまでの地道な取り組みが評価されているのだろうと思います。昨年の年度始めでは「存在価値を高めよう」という話をしました。社会に認められる学生を送り出すための教育改善など、日々の努力の積み重ねが、本学に対する信頼性につながってきました。派手なことは苦手であっても、まじめにこつこつ取り組む姿勢が「安心して任せられる」という信頼につながっています。これまで取り組んできた教育・研究や社会貢献などを継続し、さらに充実した形にしていただければと思います。

今年度は応用化学科バイオ環境化学専攻の実験棟が九月に完成し、後期から使用できる予定です。自由ヶ丘キャンパスでも隣接の土地を少し借り、教育環境の改善に取り組んでいきたいと思います。講義棟についても「もう少し広い教室がほしい」という要望を順次検討していきます。そのためにはやはり安定した経営が必要で、ガバナンスの強化ということもいわれていますが、検討し、決定したらすぐに実行に移す早い判断が必要となってきます。

総合技術研究所には、新たに研究支援本部を立ち上げます。先生方の研究環境を整え、活性化をし、加えて産学官の連携をさらに活発にしていく狙いがあります。企業と大学をつなぐ窓口の役割も担う部署ができてまいります。

大学は七年以内に一回、認証評価を受けなければなりません。本学は平成三十年度に受けることになり、今年度、その準備に当たります。一年をかけてしっかり準備し、適格の評価を受けたいと思いますので、それぞれの立場の先生方にはご協力をお願いします。

二十八年度学長賞に六氏

大学の平成二十八年度の学長賞は大学年度始め式の席上、澤木宣彦電気学科教授、雪田和人電気学科教授、森竜雄電気学科教授、横井浩治入試広報課長・フェンシング部監督、山田真吾総合企画課長、石原弘士総合企画課係長の六氏に対して後藤泰之学長から贈られました。

後藤学長らを囲み学長賞の6氏

澤木教授は平成二十三年に総合技術研究所長に就任、本学の研究成果公表と産学連携を推進するとともに、学内体制を整備し、科学研究費採択数の飛躍的な増加へつなげました。また大型研究プロジェクトのリーダーを務めるなど本学の研究活動に貢献しました。

雪田教授は「新エネルギー技術拠点プロジェクト」グリーングリッドシステムの研究を平成二十六年度から実施、愛知環境賞銅賞を受賞しました。資源循環や環境負荷低減の先駆的な事例を対象とした賞の受賞により本学の研究と社会貢献を大きく発信しました。

森教授は雪田教授とともに「新エネルギー技術拠点プロジェクト」グリーングリッドシステムの研究に参画、特に新素材活用での省エネルギーや社会貢献の広報活動を担当し、愛知環境賞受賞に大きく貢献しました。

横井監督は平成五年からフェンシング部の指導を続け、これまでに全日本選手権大会準優勝、今年度は関西学生1部リーグで三十九年ぶりの総合優勝に導きました。数多くの日本代表選手を輩出するだけでなく、指導者も数多く育成しました。

山田課長は平成二十九年度からの収容定員増の認可申請に伴って学内外の調査、研究、分析を行い、そのデータを基に申請書を作成。定員超過率の基準が厳格化される中、認可を得ることで大学経営の安定に貢献しました。

石原係長は山田課長とともに収容定員増の認可申請に取り組みました。特に入試データ、就職データ、外部アンケートなどのデータ収集、分析を担当し、申請において最も重要な設置の趣旨を作成しました。

学園設置校四校で入学式

学園の設置校四校の入学式は四月二日の愛知工業大学を皮切りに、六日が愛工大名電高校と愛工大附属中学校、七日が愛工大情報電子専門学校と順次行われ、希望を胸にした若者たちが学園に仲間入りしました。

大学に千六百六十五人

大学の入学式は八草キャンパス鉀徳館で開かれました。工学部千百三十五人、経営学部百五十八人、情報科学部二百四十一人の三学部合わせて千五百三十四人が入学し、大学院に工学研究科八十人と経営情報科学研究科四十六人の合わせて百二十六人が入学しました。また学部三年次に五人が編入しました。

後藤泰之学長は、式辞で「周囲の状況や時代の風潮に流されることなく、興味を持って打ち込める『何か』を見つけてください。すでに持っている人は、より確かなものにしてください。教職員一同、皆さんを全力でサポートします」と呼び掛けました。

これに応え、新入生を代表して情報科学部情報科学科コンピュータシステム専攻の水野涼雅君が「本学の学生たることを誇りとし、学生としての本分を全うする」と誓いの言葉を述べました。

日曜日とあって、二階席を埋めた多くの保護者たちが式を見守りました。キャンパスは久しぶりに人波であふれ、クラブ活動に勧誘する上級生たちの声がにぎやかに響きました

入学式に臨んだ新入生たち

式辞を述べる
後藤泰之学長

名電高校に六百三十八人

名電高校の入学式は若水キャンパス喬徳館で行われ、普通科四百五十七人、専門学科（科学技術科、情報科学科）百八十一人の合わせて六百三十八人が入学しました。

国歌斉唱と入学許可宣言に続き、岩間博校長が式辞で「誠実・勤勉」を校訓とする本校の伝統にふれ「学校はできないことをできるようにする所。できたときの感動と己の成長への手ごたえが、学校を楽しいものに変えてくれる」と述べました。続いて後藤泰之理事長が挨拶に立ち「明確な目標を定め、達成のために努力を続けることが、なりたい自分への近道」と励ましの言葉を贈りました。

新入生を代表し、河邉陽菜さんが「勉学にクラブ活動に精いっぱい努力します」と宣誓しました。

式辞を述べる
岩間博校長

附属中学は百二十人

附属中学校の入学式は淳和記念館体育館で行われ、百二十人が入学しました。入学許可宣言に続き、岩間博校長が式辞を述べ「真心のこもった態度で人に接し、なすべきことに全力で取り組む。そんな人として皆さんが成長してくれることを期待しています」と激励しました。後藤理事長も新入生を祝福しました。

新入生を代表して青山亮大君が「私たちは共に夢を実現させるため日々努力します」と宣誓しました。

宣誓する青山亮大君

専門学校は百二十九人
二年連続で定員超え

情報電子専門学校の入学式は同校大教室で行われ、前年に続いて定員を上回る百二十九人が入学しました。稲垣愼二校長が式辞で「皆さんは単位制に変わっての第三期生。自分のペースで学べるなど多くのメリットがあり、何事にも明るく積極的に取り組んでください」と期待する言葉をかけました。続いて後藤泰之理事長が「専門技術者としての知識・技能、実践力と何事にもチャレンジする姿勢を身につけてください」と挨拶し、太田稔彦豊田市長からの祝辞も披露されました。

これを受け、新入生を代表して情報工学科の多田匡汰君が「本校建学の精神をわきまえ、先輩を見習って勉学に励みます」と誓いの言葉を述べました。

式辞を述べる
稲垣愼二校長

誓いの言葉を述べる
多田匡汰君

選抜卓球　今年も中高そろって優勝

附属中学校卓球部は第十八回全国中学選抜大会の決勝（三月二十七日・山形総合運動公園体育館）で明豊（大分）を3―0で破り、大会五連覇を達成しました。名電高校卓球部も翌二十八日、大阪市中央体育館で開かれた第四十四回全国高校選抜大会の決勝で野田学園（山口）を3―2で下し、大会三連覇を成し遂げました。中高そろっての選抜優勝は三年連続です。学園は五月十日、両卓球部に対して学園表彰を行いました。

5連覇を達成した附属中卓球部

中学は全国大会九連勝

附属中は、第一ステージ予選リーグから攻める気持ちで他を圧倒しました。

中間東（福岡）と対戦した準決勝は、一番シングルスで小林広夢選手が相手のエースをストレートで破り、チームに大きな流れを呼び込みました。二番もエース曽根翔選手が勝ちましたが、三番ダブルスで篠塚大登選手・谷垣佑真選手が力を発揮できずセットオールで負けました。四番はキャプテン横谷晟選手が相手に襲い掛かるような気迫で相手の二番手を全く寄せ付けず、チームは3―1で勝利しました。「試合に向けて良い準備をしていた小林を一番に起用し、この勝利がやはり大きかったです」と真田浩二監督。

明豊との決勝戦でも一番小林選手が大きな働きをしました。相手のエースから一セット目を失い、二セット目も劣勢でしたが、終盤逆転勝ちをし、その勢いのまま3―1で勝ちました。二番曽根選手が勝ち、三番ダブルスは苦戦しましたが、終盤攻める気持ちを忘れずに最後まで戦った結果、チームは3―0で勝利しました。

附属中は、これで夏の全中と合わせて全国大会九連勝です。真田監督は「春夏と連続優勝していますが、接戦で一本が取れての優勝ばかりです。緊迫した場面でも選手たちは冷静さと強い気持ちを失うことがなく、メンタルが成長しているのを強く感じました」と大会を振り返りました。

高校は五回目のV

高校卓球部は3連覇・5回目の優勝
（写真提供：ニッタクニュース）

高校は、予選リーグから失点する苦しい立ち上がりとなりました。

遊学館（石川）と対戦した準決勝では、全国大会で高校生に一度しか負けていない二番の木造勇人選手が相手の出雲卓斗選手に0―3で敗れました。続く三番ダブルスで木造選手・高見真己選手が相手の出雲選手・五十嵐史弥選手を3―0で破って流れを引き寄せ、四番田中佑汰選手の勝利によりチームは3―1で決勝進出しました。

決勝は昨年に続いて野田学園との対戦。一番で全日本二位の宮本春樹選手が敗れ、三番の木造選手と高見選手のエースダブルスもゲームの主導権を握れず1―3で敗れ、チームは1―2の劣勢となりました。四番で、今大会ここまでシングルス全勝の田中選手が苦手選手を相手にしながら3―0で勝利。ゲームカウント2―2で迎えた五番は高見選手が相手選手を全く寄せ付けず3―0で勝利し、チームの三年連続五回目の優勝をもぎ取りました。

今枝一郎監督は「反省点の多い大会で、チームのいいところと悪いところが出ました。なかなか思いどおりにいかず、正直、今回は負けるかもしれないとも思いました。そうした中で選手が互いによく補ってくれました。夏にはもっと苦しい試合があると思うので、さらに大きく強くなって迎えたいと思います」とインターハイを見据えました。

あいわ幼稚園で入園式　百一人が仲間入り

名古屋市名東区の姉妹学園・あいわ幼稚園で四月八日、入園式が行われ、百一人の子供たちが園に仲間入りしました。後藤泰之園長が新入園児たちに「元気よく幼稚園に通ってきてください」と優しく語りかけ、クラスごとに園長と一緒に記念撮影を行いました。

新入園児と保護者に語りかける
後藤泰之園長

卒園式には九十七人

あいわ幼稚園の卒園式は三月十八日に開かれ、九十七人が卒園しました。お祝い着に身を包んだ卒園児たちは一人ひとり名前を呼ばれ、後藤園長から修了証書を受け取りました。後藤園長から「元気いっぱいの小学生になることを楽しみにしています」と励まされ、全員で声をそろえてお礼の言葉を述べました。

設置校四校で卒業式

学園の各設置校の卒業式は三月一日の愛工大名電高校を皮切りに、十五日の愛工大附属中学校、二十一日の愛工大情報電子専門学校、二十三日の愛知工業大学と順次開かれました。卒業生たちは学長や校長からのはなむけの言葉を胸に刻み、懐かしい校舎から巣立っていきました。

大学は千三百五十八人に学位記授与

謝辞を述べる加藤貴大さん

大学の卒業証書・学位記授与式は八草キャンパス鉀徳館で行われ、合わせて千三百五十八人に後藤泰之学長から授与されました。

博士の学位を取得した八人に学位記が一人ずつ手渡されたのに続き、修士の学位記が工学研究科修了生六十八人と経営情報科学研究科修了生二十九人の各総代に、学部生に対する卒業証書・学位記は工学部八百四十六人、経営学部百七十一人、情報科学部二百三十四人の各代表にそれぞれ授与されました。

後藤泰之学長は式辞で「イノベーションを含めた『創造』は社会が繁栄するための重要なテーマである一方、豊かな人間性に裏付けられていなければ人を幸せにはできない。新しい時代の担い手となるため、本学の建学の精神と教育のモットーの意味をもう一度考えていただきたい」と語りかけました。卒業生を代表して加藤貴大さん（経営情報システム専攻）が「自身のより一層の向上に努め、愛知工業大学卒業生としての自覚と自信を持ち、社会に貢献いたします」と謝辞を述べました。

四十五人が国公立大合格

名電高校の平成二十九年春の国公立大学合格者数は四十五人で、過去最多の六十人だった前年に次ぐ多さとなりました。私立では愛知工業大学への二百七十四人をはじめ、南山大学二十四人、明治大学九人、同志社大学七人、早稲田大学六人、上智大学四人、慶應大学二人などでした。岩間博校長は「国公立大は昨年より総数は減りましたが、今年は名古屋大学合格の四人をはじめ大学で学びたいことについて明確な目標をもって努力を続けた多くの生徒が、私立大も含む難関大学への合格を得ています」と話しています。

高校は六百四十三人卒業

答辞を述べる眞木励君

名電高校の卒業証書授与式は若水キャンパス喬徳館で行われ、科学技術科百八十九人、情報科学科四十人、普通科四百十四人の合わせて六百四十三人が学び舎を巣立ちました。

岩間博校長が各科・コースの代表に卒業証書を手渡し、式辞で「何よりも命を大切に、そして自分を支えてくれる人々への感謝を忘れず、目標を持って人生をたくましく切り拓いていかれることを願っています」と述べました。続いて後藤泰之理事長が「チャレンジ精神と、培った『名電魂』を忘れずに、それぞれの夢に向かって前進してください」と励ましの言葉を贈りました。卒業生を代表して科学技術科の眞木励君が「これからも大切に日々を送りたいと思います」と答辞を述べました。

中学は百十五人巣立つ

附属中学校の卒業証書授与式は淳和記念館で開かれ、百十五人が卒業しました。卒業生を代表して井口美南海さんが岩間博校長から卒業証書を受けました。

岩間校長は、式辞で「自分の可能性を信じて未来の扉を大きく開いていってくれることを期待しています」とはなむけの言葉を贈りました。後藤泰之理事長も挨拶で「高校生活では目標をしっかり意識し、準備するということを心がけてください」と語りかけました。これに応えて、荻野泰綺君が「どんな困難があっても『誠実・勤勉』の校訓を忘れず乗り越えていきます」と力強く答辞を述べました。

専門学校からは七十九人

卒業証書を受ける仁瓶大地さん

専門学校の卒業証書授与式は同校四階大教室で行われ、七十九人が卒業しました。代表の仁瓶大地さんに稲垣愼二校長から卒業証書が手渡されました。稲垣校長は「一層の研鑽努力を積まれ、社会の発展に貢献できるエースになられることを」と式辞で語りかけました。後藤泰之理事長も「広い分野の知識・技能を積極的に吸収して社会に貢献し続けてください」とはなむけの言葉を贈りました。卒業生を代表し近藤祐太さんが「各々の目指す夢や目標へ向かって歩いていきます」と謝辞を述べました。

高校フェンシング部が全国高校選抜大会で団体優勝

今大会から実施のサーブルで

名電高校フェンシング部は三月十八～二十日に甲府市総合市民会館山の都アリーナで開かれた第四十一回全国高等学校選抜フェンシング大会で、男子サーブル団体優勝しました。

大会は、第四十回までフルーレの学校対抗戦だけを実施していましたが、世界での日本人選手の活躍により、今大会からエペとサーブルの学校対抗戦も実施されることになりました。

サーブル団体を制した選手たち

大会には十七歳以下日本代表選手である尾矢陽太選手と、世界の大会も経験している平田佳史樹選手、加賀匠馬選手を中心に、宮地恭平選手、松田隆之介選手が加わる五人のメンバーで臨みました。

競技は、都道府県予選の優勝校が各地区予選に進出し、そこで上位に入った計二十四チームによるトーナメント戦となります。試合は、三選手対三選手があらかじめ決められた順番で九試合を行い、一試合目は5点まで、二試合目は10点まで…九試合目は45点までと、チームで積み重ねた得点を争う方式です。本校は昨年十二月に行われた東海選抜で優勝していたため一回戦はシード。二回戦の一関第二（岩手）戦は45対22で順当に勝ち上がり、準々決勝で、本校とともに優勝候補と目されていた三本松（香川）と対戦しました。

「六試合目終了時には19対30と11点差をリードされている展開でしたが、七試合目で加賀が5点、八試合目で平田が2点、九試合目で尾矢が4点差を逆転して、45対42で勝利しました。誰もが『三本松が勝ったな』と思う試合展開での大逆転でした」と、冨田弘樹監督。

準決勝の玉野光南（岡山）戦は終始リードして45対32で勝利し、決勝に進出しました。決勝は羽島北（岐阜）との東海対決となり、最初こそリードを許しましたが、難なく逆転。45対33で優勝を果たしました。

学園は五月二十二日、高校フェンシング部を学園表彰しました。

川出顧問と久保元参事に理事長賞

学園は五月九日、学園の発展に寄与した川出善晴・学園顧問兼監査室長と久保康雄・学園総務部元参事に対して理事長賞を授与しました。

川出顧問は本学を卒業した昭和四十九年に学園に採用され、財務系の部署などで四十年以上にわたり卓越した業務遂行能力を発揮しました。専門学校開設時に適正な事務業務の確立を果たすなど、学園の事務機能の改善に取り組み、窮状を救う事態も度々ありました。学園創立百周年記念事業としての募金活動では、募金事務局の責任者として多額の寄付金獲得に貢献しました。

久保元参事は平成十九年に学園に採用後、一貫して広報業務に携わり、学内広報における学園・設置校情勢の周知徹底、学外広報におけるPRに多大な貢献をしました。さらに、理事長・学長を約四十五年務めた後藤淳・現総長の半生をまとめた「軌跡　後藤淳の歩んだ道」を上梓するにあたり、約三年にわたってインタビューを重ね、総長の意をくみながら執筆、編集しました。

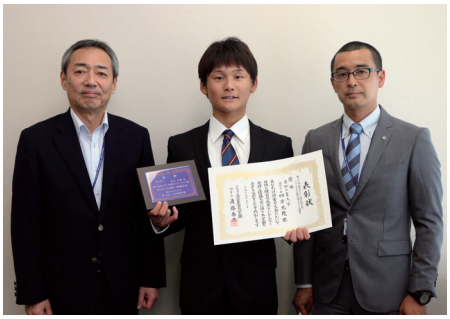
川出顧問は三月三十一日付で定年退職し、現在は非常勤の顧問。久保元参事は三月三十一日付で総務部広報課臨時職員を終了しています。

理事長賞の授与は本部棟三階会議室で行われました。後藤泰之理事長が両氏に表彰状を手渡し「川出さんは冷静な性格を大いに発揮され、皆さんからの信頼も厚く、さまざまな要職を歩いてこられました。久保さんが三年間のインタビューでまとめた後藤総長の軌跡は読みやすく、総長の人柄がよくわかります」と両氏の功績をたたえました。

後藤理事長を囲んで、川出顧問（右）と久保元参事

これにこたえて川出顧問が「人生の大部分を学園でお世話になり、重箱の隅をつつくようなことを言って皆さんにいろいろご迷惑をかけたと思います。なんとか無事に卒業することができました」、久保元参事が「総長先生の生のお話を聞き、本をまとめられたのは稀有な例かと思います。学園で仕事をさせていただいたのは幸運であり、やりがいがありました」と、それぞれお礼を述べました。

競技スキー部四方選手が全日本制覇


学園表彰を受けた四方元幾選手ら

大学競技スキー部の四方元幾選手（経営学科四年）が、三月に富山県南砺市・たいらスキー場で開かれた第三十七回全日本スキー選手権大会フリースタイル競技のモーグルで初優勝しました。学園は六月一日、競技スキー部に対して学園表彰を行いました。

四方選手の全日本制覇は昨年のデュアルモーグルに続いて二回目です。今季の世界選手権で二冠を達成した堀島行真選手（中京大）や他のナショナルチームメンバーが出場している中での価値ある優勝となりました。四方選手は外国人選手に負けないパワーをつけるために意識して食事量を増やし、筋力トレーニングの割合を高めることで課題だったスピードに対応できるようになりました。現在は二〇一八年の平昌五輪出場を目指し、雪上・陸上トレーニングに励んでいます。

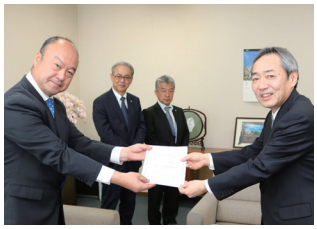
学園表彰は八草キャンパス本部棟で行われ、後藤泰之理事長が四方選手と西裕之監督に表彰状を手渡して「ぜひオリンピックを目標に頑張ってください」と期待する言葉をかけました。

四方選手が平昌五輪派遣選考で勝ち残れるかは「ギリギリのライン」（西監督）といいますが、来季の全日本強化指定選手にも決定し、夢に向かって一歩前進。後藤理事長の激励にこたえて「愛知工業大学の学生としてオリンピックを目指すという目標に向かい、一つずつ階段を上ることができました。残りの一年も逆境があると思いますが、それに負けずに精進していきたいと思います」と今後の活躍を誓いました。

徳倉建設が学園に寄付

学園の後援会組織「愛名会」会員企業である徳倉建設（名古屋市中区）から本学に百万円の寄付がありました。

本学ラグビー部ＯＢの横地博之・徳倉建設執行役員からラグビー部監督の岡本昌也経営学科教授を通じて「会社創立七十周年記念に」と申し出があり、受配者指定寄付金制度の対象である学校法人名古屋電気学園教育研究支援募金に対して寄付が行われました。


寄付金受領書を受け取る徳倉建設の伊藤主税取締役常務執行役員（左）

五月九日、徳倉建設の伊藤主税取締役常務執行役員らが八草キャンパス本部棟を訪れ、後藤泰之理事長から寄付金受領書を受け取りました。徳倉建設には、これまでに本学から四十一人が就職しています。伊藤取締役常務執行役員も本学ＯＢであり「恩返しと感謝の気持ちを込めて」と寄付の趣旨を話しました。

愛名会総会モノづくりテーマに青木氏が講演

学園の後援会組織・名古屋電気学園愛名会の平成二十九年度総会は五月二十六日、会員や学園関係者ら三百四人が出席して名古屋東急ホテルで開かれました。

挨拶に立った佐々木眞一会長は、二十八年度の就職交流事業などに触れて「本会の目的を達成するため、活動をより活発に進めたい」と協力を呼び掛けました。続いて名誉会長の後藤泰之理事長が、会員企業の支援に対してお礼を述べるとともに「四月から大学に研究支援本部を立ち上げ、さらに企業との産学連携を強化していく」などと学園の近況を報告しました。

総会では、二十八年度の事業や決算、二十九年度の事業計画や予算などが報告されたほか、大学キャリアセンターの津田紀生センター長が二十八・二十九年度の就職状況を説明し、学生のインターンシップ活動への協力も呼び掛けました。

講演する青木豊彦氏

この後の講演会では、東大阪市モノづくり親善大使を務める株式会社アオキ取締役会長の青木豊彦氏が「モノづくりの心意気とまいど1号の成功」と題して約一時間話をしました。

同社は、農業用機械部品の製造からロボット部品・航空機部品製造へと進出を果たし、一九九七年にボーイング社の認定工場となりました。不況にあえぐ東大阪を若者がモノづくりの魅力にひかれて集まる街にしたいと尽力する青木氏は、二〇〇二年の東大阪宇宙開発協同組合設立を経て〇九年一月、人工衛星「まいど1号」の打ち上げに成功しました。

青木氏は「『社員の目が光っているから』という理由でボーイング社は認めてくれた。仕事への誇りは、ものすごいパワーになるんです」などと、笑いや涙を交えて体験を熱く語り、聴く者の心をつかみました。